

子供のための学校訪問コンサート

音楽を届けること、音楽を通して伝えること

久保田 葉子

School Concerts for Children Music in Classrooms, Messages through Music

Kubota Yoko

Abstract

I have visited schools and institutes for handicapped people to give concerts, which were organized by Japan Foundation for Regional Art-Activities and public concert halls. Today, there are many activities of music and school concerts, where the artists bring live performances out of concert halls, and make classical music more familiar to children. In this research, I will describe my school concert experiences and cases in Japan and Germany in this field. In addition, I would like to think about the problems of training and the studies by musicians, who will provide concerts for children, and have communication with the audiences.

Key Word

school concert, classical music, performance, guide, interactive, organizer

[要約]

私は2004年より財団法人地域創造や各地方公共団体と連携して、幼稚園、小中学校、養護学校への音楽アウトリーチ(訪問コンサート)を行ってきた。演奏家がクラシック音楽の敷居を低くする工夫をし、コンサートホールを飛び出して生の音楽を届けることは今日では珍しいことではないが、ここで改めてその活動を振り返り、子供のためのコンサートの意義や実践のために必要な準備、音楽を通じた交流についてまとめる。また、日本やドイツで子供のためのコンサートがどのように運営され、その活動が継続されているかを研究し、今後の実践にも活かしたい。最後に、子供のための訪問コンサートを行う中で見えてきた、音楽教育の課題についても触れたい。

キーワード

学校コンサート、クラシック音楽、演奏、解説、参加型、主催者

はじめに

クラシックのコンサートが行われるホールの客席を見渡すと、年齢層が極端に偏っている

ことが多い。50歳より年配と思われる聴衆が大多数を占めることはよくあり、このままではクラシック音楽の将来が危ういという声が演奏者や主催者の間で聞かれる。その危惧は恐らく何十年も前からあったものだろう。しかし、実際にはクラシック音楽が廃れてしまうことはなく、今日でも莫大な数の公演が行われている。全人口の1~5%とも言われる、クラシック音楽に親しむ人の数を少しでも増やし、若い世代にも音楽文化に触れる機会を持ってもらうための試みとして注目・工夫され、発展している活動の一つに音楽アウトリーチがある。これは、日頃コンサートホールに足を運べない方のために演奏家が老人ホーム、養護施設などに出向いたり、まだクラシック音楽を聴く機会を持ったことのない子供たちのために小中学校や幼稚園を訪問したりして、一人一人の元へ生の演奏を届ける活動である。これはアーティストにとっては演奏活動の原点とも言うべき、音楽を通じた交流を密度濃く体験できる場でもあり、距離の近さから反応が手に取るように分かるため、聴く人たちから教えられ、鍛えられることも多い。その音楽アウトリーチの実践は簡単なようであり、実は通常の演奏会以上に念入りで多岐にわたる準備が必要なことも多い。ここでは、主に小学校へのアウトリーチ、つまり子供のための学校コンサートの意義を改めて考え、コンサートを成功させる鍵となる実践面での注意点を整理し、アウトリーチは継続が大切であるので、活動を単発で終わらせないためにどのような支援の仕組みがあるかを調べたい。また、音楽大学の教育において、クラシック音楽の敷居を低くして音楽や楽器の楽しみを広める活動の重要性を学生に伝えきれているか、そして聴衆とコミュニケーションを取ることを十分に訓練できているかといった観点でも論じたいと思う。

1. 子供のためのコンサートの必要性

「クラシック音楽は難しい」という言葉を聞くことがある。「現代音楽は難解すぎて分からないので、もっと聴きやすくして馴染みやすいプログラムが聴きたい」という希望が出されることもある。クラシック音楽はいつから“難しいもの”“分からないもの”になってしまうのだろうか？ こういった発言にぶつかる度に疑問を感じ、どうしたらその壁をなくしていけるのだろうかという思いを抱えながら演奏を続けていた頃、私は学校訪問コンサートの活動に出会った。子供は何の偏見もなく音楽を聴き、鋭く観察して全身で受け止め、何よりも音楽を楽しんでいた。現代音楽はむしろ面白いと人気が高く、抵抗感のようなものは一切なかった。子供時代にクラシック音楽に親しむ機会が持てれば、その後も身構えることなく自然に音楽と付き合っていけるのではないか。そして、すぐにクラシック音楽のファンとはならなくても、学校コンサートを体験した子供たちが大人になった時、いつかまた聴いてみようと思ってくれたら嬉しい。そのためには小学生ぐらいの時期にまずは音楽と身近に接する機会を作りたいと思うのである。

1.1. クラシック音楽に触れる入り口として

テレビ、ラジオ、CD等を通して音楽を聴くことは誰でも簡単に出来るが、生の演奏から得

られる印象の強さ、イメージの表出としての演奏が目の前で展開される時の驚きや共感等、ライブでしか味わえないものは多い。私も実際、「ピアノを演奏しながら息を休めてすごいい息をするのがコツなのかと思いました」とピアノを習っている小学生から感想をもらったことがあるのだが、子供は息遣いや演奏に入る時の表情を含めて目の前で起こっていることをよく観察し、全身で音楽を捉えている。作品の性格、様式、特徴をよく聴き分けた感想が聞けることもあり、子供の能力はすごいものだと思心させられる。音楽を教えている現場の教師もまた、演奏に集中する子供の姿や、学校の音楽室という日常空間でクラシック音楽を聴く体験に刺激を受けて、授業をさらに工夫したいという気持ちを新たにしようである。

そして、学校訪問コンサートの活動をするにあたっては、クラシック音楽に興味を持って欲しい、どんなに小さくても種を蒔いていきたいという希望だけでなく、自分の演奏する楽器、ピアノそのものの魅力をもっと多くの人に知ってもらいたいという気持ちもある。学校訪問コンサートの中で、演奏の合間に楽器の話を見せてもらったり、ピアノの周りに集まって近くから観察してもらったり、実際に数名の子供と共演するシーンを作ったりと毎回工夫して、ピアノの奥深い世界、表現の可能性の大きさを、楽器の制作・メンテナンス・演奏をする人の想いや営みと共に伝えたい。子供たちの生活空間である学校に出かけて行き、間近な距離から生の演奏を届けることは、音楽との出会いを作り出すのに非常に有効な方法であろう。

1.2.想像力を育てる

楽器やクラシック音楽の魅力を伝えたいと思うのと同時に、よく考えるのは、一つの学校コンサートで子供たちにどんなメッセージを届けるかということである。今日ではインターネット等で簡単に情報が手に入る代わりに実体験が不足していたり、コミュニケーションが希薄で他者を思いやる心が育ちにくく、家庭や学校でも恐ろしく痛ましい事件が起こったりしている。想像力の欠如から引き起こされる問題の数々が報じられる度に、なぜこうなってしまったのだろうかと考えさせられる。音楽をはじめとする諸芸術には、実際に見たことのない景色や人々を想像したり、芸術作品が気持ちを豊かにすることにより、他者への温かいまなざしまでもが育まれたり、計り知れない効果があることだろう。音楽を通して、作品に敬意を払い大切にすることや、想像力をふくらませて芸術を楽しむことが誰でも自然にできるのだということも伝えていきたい。子供たちにも、表現することの楽しさを感じ取り、楽器を弾くことで別の形でも、伸び伸びと自分を表現して欲しいと思う。

2. 子供のためのコンサートの方法

コンサート会場に行ったことのない子供たちのための学校訪問コンサートでは、どんなことに気を配り、準備すればいいのだろうか。もちろん“型”や“正解”があってそれがいつでもどこでも通用するわけではなく、地域によって、学校によって、クラスによって、日によって、全てのコンサートが一度限りの新しいものではあるのだが、これまでの実践例から見

えてきた、成功に欠かせない要素について挙げてみたい。

2.1.具体的な実践について

2.1.1.気をつけること、予め準備すること

まず会場となるスペースの問題であるが、学校訪問コンサートでピアノを使う場合、音楽室か体育館が主な選択肢であろう。クラシック音楽を聴いたことのない子どもたちにとって距離的な近さが関心と集中力を高め、演奏する側も全員の顔がよく見えていることによって反応を受け止めながらコミュニケーションが取りやすい。学校訪問コンサートは全校生徒を対象に体育館で行うよりも、音楽室で30~50人規模の小さなグループで、マイクを使わずに話せる空間の方がずっと密度が濃く、音楽の浸透も良い。一度に聴ける人数が少ないのは一見、効率が良くないようだが、実際には子供が受け取る印象の強さが断然違ってくるので、一度に参加するグループの規模は小さい方が良いだろう。子供たちは椅子に座っても座布団で床に座っても構わないと思うが、声楽の場合は子供が床に座ると視線を合わせようと下を向いて歌うことになり、声楽家に負担があるかもしれない。

次にコンサートの長さであるが、休憩をはさまず、授業ひとコマに収まる長さがちょうど良いのではないかと思う。幼稚園なら30分、小学校で45分、中学校で50分が目安になるだろう。また、曲ごとの長さ(演奏時間)も対象となる子供の年齢によって考慮する必要がある。一曲が10分以上だと子供にとっては長すぎるので、2~5分ぐらいの質の高い作品を用意したい。

子供のためのプログラム選びに関しては、多くのアイデアや助言があるが、青少年オーケストラによる子供のためのコンサートを多く手がけてきたDetlef Hahlweg氏は次のように述べている。

Es eignen sich viel mehr Werke für Kinderkonzerte, als man zuerst annimmt. Wichtig ist herauszufinden, was das jeweilige Werke an Besonderheiten hergibt beziehungsweise welche Hörhilfe gegeben werden können, um den Kindern das Werk nahe zu bringen. Diese Analyse ist die Grundvoraussetzung für das Gelingen eines Konzertes. Sie sollte auch eine präzise Antwort auf die Frage liefern: Welche Ziele sollen durch das Konzert erreicht werden? ⁽¹⁾

(子供のためのコンサートに適した作品は、思ったよりもずっと多いものである。大切なことは、その時々作品が、作品の特殊性でもって何をもたらしてくれるのかを見つけ出し、子供たちに作品をより近づけるためにどのような手助けができるだろうかと探ることである。この分析がコンサートを成功させる大前提となる。また、このコンサートで到達したい目標は何なのかという問いにも、こういった分析が明確な答えをもたらしているべきであろう。)

先に子供は現代音楽を喜んで聴き、受け入れると書いたが、調性を持たない作品、古典的な形式に当てはまるとは限らない作品、特殊奏法を含む現代曲も、子供のためのコンサートに適した作品に数えられるかもしれない。誰でも聴いたことのある曲には親しみを感じ、「そ

の曲なら知っている!」とすぐに反応が見られて演奏する側も嬉しいものだが、子供たちに楽しんでもらいたいというサービス精神と同時に、選曲の際にはテレビで流れるメロディーや映画音楽を安易に並べるのではなく、本物の芸術を届けたいという意識が大切だと思う。

もちろん映画や子供向け番組の中にも優れた音楽が数多く存在するのは事実であるが、クラシック音楽のプログラムに集中していた子供たちが、アンコールとしてアニメ・ソングを聴かせたとたんに一気に子供の日常を支配する通俗的な世界に戻ってしまうこともあると聞く。子供のための企画と言っても、最初から最後の退場の瞬間まで気の抜けない真剣勝負であり、通常のコンサートと何ら変わるところはない。学校訪問コンサートで、専門の音楽ホールのような音響・楽器が保障されていないことも多い条件の中で、質の高い演奏を聴いてもらうためには、通常のホールでの演奏以上に訓練と経験も必要になるだろう。

会場、聴き手のグループの規模や年齢層、プログラム内容が決まり、通常のコンサートと同様の備品やタイム・スケジュール、役割分担、宣伝方法等の確認が出来ても、まだ十分ではない。クラシック音楽にあまり馴染みの無い学校を訪問する際には、現場の教師とのコンタクトや音楽を聴くことへの子供たちの期待を高める工夫が欠かせない。校長・教頭先生や学級担任、音楽専科の教員、主催者の中で地域のことをよくご存知のキーパーソンと連絡を密にして、現在子供たちが取り組んでいること(合唱や美術、国語など他教科のことを含む)や、日常生活の様子、これまでの音楽経験、またその地域の文化についてよくお話を伺い、音楽プログラムとの接点がないか、子供と共演するシーンが作れないか等を検討する。ある日突然、知らない人(演奏者)が学校にやって来てお互い緊張してしまうのを避けるためには、できれば予め双方向から働きかけをして、子供から出してもらった質問に答えるインタビュー形式の手紙のやり取りやビデオレター、写真等を活用して、掲示をお願いするなど、学内でコンサートが行われる案内をしておくのも大切なことである。学校コンサートを保護者にも公開する場合には特に、大人にも情報をきちんと広めておけば、コンサートの前後に家庭内で話題が広がることも期待できる。

2.1.2.演奏以外の要素

クラシック音楽をあまり聴いた経験の無い子供たちにとって、演奏者が作品について自分の言葉で語ることが音楽を聴く際の助けとなり、より親しみを感じることができると言うことは想像がつく。私自身、学校訪問コンサートでは必ず、プログラムとして選んだ曲のどこに惹かれたか、また作品の特別な点や作曲された背景、楽曲の形式や様式について話す。作品に度々登場するメロディーやリズム要素を取り出して、予め一部を聴いてもらい、解説することもある。その際には聴く人の年齢を考えてトークの長さや内容を考え、なにより目に見えない音楽を目に見えるかのように描写して、それぞれがイメージを膨らませるのを手助けしたいと思う。子供たちは飾らずにありのまま存在して、全身で音楽を受け止めてくれるので、演奏者が必要以上にエンターテイナーになろうとしたり、格好をつけて自分を作ろうとしたり、偽りがあるのがいちばん良くない。心を開いて子供に接し、真摯に演奏を届ける中で、子供がふと漏らした感想や言葉が聞き取れるようになり、音楽を通して交流

する感覚が生まれてくる。私自身は色々な年齢の子供のところへ出かけていき、ホール企画運営に携わる専門家や学校関係者の方たちのアドバイスを頂きながら経験と工夫を重ねることで、トークや進行でこうした方が良い、これはしてはいけないといった点をひとつひとつ見つけていったように思うが、だいぶ後になってこの分野の書物を探し求めたところ、多くの助言を見つけることができた。例えば、当たり前のようにでいて慎重になるべき事柄として専門用語の使用がある。

Falls Sie einen Fachausdruck benutzen wollen, sollten Sie diesen erklären, damit wirklich alle Zuhörer verstehen, was Sie damit meinen. Danach empfiehlt es sich, den Begriff häufig zu verwenden und ihn so dem Publikum vertraut zu machen. ⁽²⁾

(専門用語を用いる時は、聴いている皆が理解できるように説明すべきである。説明した後はその概念を何度か使って、聴衆がしっかり分かった状態にすることが勧められる。)

専門用語は説明無しについ使ってしまうまいよう、相手の身になって考えたい。また日本語は同音異義語が多いので、一度聞いただけでは混乱する単語をなるべく避けるように気をつけている。トークは長すぎても短すぎても集中を妨げるものなので、演奏とトークのバランスにも毎回気を遣うものだ。

Konzentrieren Sie sich auf ein oder zwei musikalische Aspekte und beleuchten Sie diese aus verschiedenen Perspektiven. ⁽³⁾

(一つか二つの音楽的な観点に集中し、そこに様々な視点から光をあてること。)

適度な分量と内容を検討するためには、トークの内容にふさわしいと思われるアイデアをまずはできるだけ多く箇条書きにして挙げてみて、そこから削り取って一つか二つを選び取って膨らませるのが良いのだろうと私も考えている。演奏者が作品に対して抱くイメージと聴く側の一人一人が音楽から創り上げるイメージは同じではないことも肝に銘じ、トークによって聴衆の自由な想像を妨げたり狭めたりしてしまわないようにすることも大切だろう。

(Vor-)urteil: Interesse an einer unbekanntem Musik weckt man am besten mit Hintergrundinformationen und Hörhilfen.

Gegenthese: Hintergrundinformationen und Hörhilfen können manchmal auch der eigenen Neugierde im Wege stehen. ⁽⁴⁾

(先入観・自己判断:知らない音楽に興味を呼び起こすには、作品の背景についての情報や聴きどころの解説がいちばん。

アンチテーゼ:作品の背景についての情報や聴きどころの解説が聴衆自身の好奇心の邪魔をしてしまうことが多々ある。)

この二つの考え方の狭間で頭を悩ませ、工夫をするのが解説付きのコンサートの面白いところでもあり、より聴衆と交流を深め、喜んで頂けるコンサートを目指す際に、演奏者が学び続けるべき課題でもある。

学校訪問コンサートでは、より音楽を身近で親しみやすいものとするために、音楽という

ジャンルを越境して、詩の朗読や絵画、工作、身体表現等とのコラボレーションも考えられる。その地域の民話や、子供たちがちょうどコンサートの時期に取り組んでいる詩の朗読と共演したり、絵画からインスピレーションを得て作曲された作品を演奏する際にその絵画作品をスクリーンに映して見せたりと可能性は広がっている。他にも子供たちがじっと座って聴くだけでなく、参加する試みとして、手作り楽器を製作して共演、子供の創作活動と即興演奏の組み合わせ、音楽に合わせて身体を動かすこと、子供の楽器演奏や歌との共演、楽器の秘密を解き明かすようなコーナー、子供からの質問に答える対話を挟む等、学校訪問コンサートのプログラムの一部に子供が自ら発信し参加する場を設けると、体験することによって音楽をより身近に感じたり、自分も演奏してみたいと強い関心を持てたり、印象を強めることにも繋がるようである。限られたコンサートの時間の中で欲張りすぎると、演奏そのものの時間に食い込んでしまうので、ここでも構成や配分を間違わないようにしたいものだが、質の高い演奏を子供たちの元へ届けることをなによりも大切にしないといけないのは言うまでもない。

Die Musik sollte nicht zur Illustration der (...) Verstehens- und Erlebenshilfen absinken. Die Aufgabe der genannten oder weiterer Möglichkeiten bestehen vielmehr darin, eine lebendige und persönliche Beziehung zur Musik aufzubauen.⁽⁵⁾

(音楽そのものが、理解と音楽体験を助けるために行う活動の飾りへと弱められてしまうべきではない。音楽の理解を助けるために行われる様々なことの使命はむしろ、音楽との生き生きとした、個人的な結びつきを築くことにある。)

子供たちに是非聴いてもらいたいと思うような優れた作品を日々探し、解説の素材になるアイデアや良い例えが思い浮かべば意識的に蓄えておき、演奏そのものを磨く努力を怠らず、学校訪問コンサートが具体的になったら現場の状況や希望をよく聞き、細やかな準備をする。コンサートの中では一方通行に演奏するのではなく、双方向に影響しあえる活動を工夫し、子供の反応によく耳を傾けて対話する。そういった行為そのものが演奏家を育て、成長させてくれる。

子供と対話をするためには、良い質問を投げかけることも大切である。イエス、ノーで答えられない聞き方をするとか、クラスのムードを自由に発言しにくい方向に引っ張ってしまう恐れのある子供をまず巻き込むといったテクニク的なことも無くはないのだが、子供が話し、表現したいと思える雰囲気と信頼関係を作り出したい。

Gehen Sie auf Kinder zu, auch ins Publikum hinein. Am eigenen Platz trauen sich Kinder eher zu einer Äußerung als auf der Bühne. Wenn Sie Kinder etwas auf der Bühne entdecken lassen, setzen Sie sich mit in eine Reihe und suchen Sie gemeinsam mit den Kindern --- aus deren Blickwinkel.⁽⁶⁾

(子供の元へ、また聴衆の中へ入っていくように。子供はステージに呼ばれるよりも元々いる場所の方が発言しやすいものである。子供にステージ上の何かを発見させようと思ったら、自分が客席の中へ行って一緒に座り、彼らの視点から子供と

一緒に探すと良い。)

演奏しながら動ける楽器の場合には子供の真ん中に入っていき、ピアノのように自分が動けない場合には子供に近くまで来てもらうと視点を近くすることができる。その近さがまた学校コンサートの魅力であろう。

2.1.3.子供の反応、反響から学ぶこと

子供たちが音楽を聴いた時の感想の表し方は様々で、作品の本質を捉えて言語化できる子もいれば、一言「心がすっきりした」とか「自分もやりたい」と言う子もいる。目を輝かせて集中している姿もあれば、あっけにとられてぼかんと口を開けたまま何も言わず、数時間経ってから担任の教師に感想を次々話し始めた例もあった。訪問コンサートの後、手紙をもらい、子供の観察力と表現力に驚かされることは多い。思わぬところに注目されていることもあり、正直な反応に励まされたり教えられたりしている。

コンサートの中で会話をする際には、子供がふと漏らした言葉の中に真実があることが多いので、よく耳を澄まし、目でも会話して子供の表情をよく見る。進行のことを考えつつも、自分の立てたプランから時には脱線する余裕が持てて、子供との対話に時間を割くことが直感的にできるようになるまで経験を重ねたい。自分が大切にしている世界(音楽)を真剣に見せて、聴く人のことを大切に、心を開いて反響を受け取ることは、まさに音楽活動の原点であり、演奏者の表現を磨いてくれるものでもあると思う。

作曲家の三善晃氏は、ある音楽の授業への感想を求められて『音楽教育の難しさと幸せ』という文の中で「もともと音楽の授業などというものは(数学などと違って)直線コースを進んでいくものではない。それはコンパスで円を描き続けるように、何回でも同じ所に戻って来、同じ弧をなぞるものだ。戻ることの求心性、なぞってゆくことの勇気は、さまざまな内省と超克からしか得られまい。その情意情動を生徒とともにできるのが音楽の教室ではないか。なぜならそうして描かれる円弧こそ、人の心と外界を交流させる円環運動の軌跡であり、なぞられた弧は、一人一人の人間の人生のなかでは、螺旋のように少しずつ高まるものかもしれないのだ。⁽⁷⁾」と書いている。音楽を通して子供たちと交わる中で、それがどのように役立つのかが分かりにくかったとしても、自己の音楽との関わり方を見つめて研鑽を積み、現場では時に予期せぬ反応に驚いたり喜んだり考えさせられたりしながら子供に音楽を届け、いつかその場で聴いていた子供たちの中からクラシック音楽に関心を持ち、音楽で伸び伸びと自己表現できる人が育っていったら嬉しい。

2.2.実践のための仕組みづくり

学校訪問コンサートの実践や継続には、個々の演奏家の努力だけでは解決しない経済的な問題や、いかに継続可能な仕組みを作るかという制度的な問題がある。ここではいくつかの取り組みに注目し、その考え方や支援のあり方から学びたい。

2.2.1.財団法人地域創造の取り組み

財団法人地域創造は平成10年に「公共ホール音楽活性化事業」をスタートさせた。これはオーディションで選考された若手演奏家を日本各地の公共ホールに派遣して、地方公共団体等と共催でコンサートとアクティビティと呼ばれる4つのプログラム（ワークショップやミニ・コンサート、学校や施設への訪問コンサート等、音楽を通じた地域の市民との交流が行われる）を組み合わせるもので、「音楽と住民との幸福な出会いの創出によって、地域と住民に活力を与えること、公共ホールを活性化すること、音楽芸術と音楽家を活性化すること⁽⁸⁾」の3点を使命としている。アーティスト派遣に関わる出演料、交通・宿泊費、日当、楽器運搬費、マネジメント料、地域交流事業のためのピアノ調律費といった経費は財団が負担する。企画をスムーズに進めるために経験豊かなコーディネーターを演奏者と一緒に派遣し、実践的で的確なアドバイスによって事業を円滑にする仕組みが十分に考えられているのも特徴である。さらに、企画に携わるホールの職員のための研修の機会を定期的に設ける等、若手演奏家、ホールのスタッフ、地域交流プログラムの参加者と、そこに携わる人を何重にも育てる工夫がなされ、その取り組みは知恵を蓄積しながら広がり続け、既に10年以上続けられている。また、一度このプログラムを経験した実施団体は、その後も期間や助成額の規定内で支援の対象となり、演奏家にも継続して参加の機会がある。これまでに参加した地方公共団体の中には、学校訪問コンサート等の地域交流プログラムを地元のアーティストの間にも広めて活動を独自に拡大していく動きも見られ、音楽に触れ合う機会作り、ホールと地域の結びつきの強化、ホールの観客層の多様化、演奏家と聴衆に新たな視点と意識を呼び起こす等、大いに成果を上げている。

2.2.2.NPOトリトン・アーツ・ネットワークの取り組み

NPO(特定非営利活動法人)トリトン・アーツ・ネットワークは2001年に設立され、第一生命ホールにおける自主企画公演(芸術活動)と、中央区を中心とした地域に密着したコミュニティ活動(特に音楽アウトリーチ)を二本の柱として展開してきた。ホールでの公演は、これまであまり音楽に親しむ機会の無かった様々なライフステージの人を対象にクラシック音楽との出会いの場を提供し、出演者は音楽アウトリーチ等のコミュニティ活動にも積極的に取り組んでいる。教育機関や各種施設等でのコミュニティ活動は年間40回以上行われ、音楽が地域の人と人をつなぐ役割を果たしている。このような活動を資金面で支えるのは第一生命と、会員制度に加入する個人・法人会員からの会費で、各種助成団体に助成を申請することもしている。また、トリトン・アーツ・ネットワークでは「サポーター」と呼ばれるボランティアスタッフが公演やコミュニティ活動に参加して力を発揮しているのも特徴で、ビデオやカメラ撮影、記録レポートの作成等、アウトリーチの現場を手伝い、活動の継続に協力している。⁽⁹⁾ 地域の住民の関心や協力も、文化活動の継続には欠かせない要素である。

国内ではその他にも「NPO法人 子供に音楽を」による学校の子供たちに演奏を届ける活動、

オーケストラのメンバーや演奏家団体、個人によるアウトリーチの試み、学校のPTAの希望で実現する企画等、各地で様々な取り組みがなされている。

2.2.3.ドイツの取り組み

ドイツでは、1996年にDetlef Hahlweg氏(ミュンスター学生オーケストラ)が子供のためのコンサートの振興に最初の刺激をもたらした。このオーケストラはHermann Große-Jäger氏の構想により子供のためのコンサートを行い、今日まで継続して成功をおさめている。そして、地域での活動だけではなくドイツ全体に子供のためのコンサートの支援を広めていこうと考えたのである。1997年にはJeunesses Musicales International (JMI)のロッテルダム総会で、“新しい聴衆”との取り組みについて各地の活動が報告され、国際的にこのテーマの今日的意義が示されることになる。1998年にはJMIのドイツ部門であるJeunesses Musicales Deutschland (JMD)が子供のためのコンサートを将来のプロジェクトの最優先課題とすることを決定した。翌1999年にそのための専門チームが結成され、2000年の「第1回 青少年のためのシュトゥットガルト音楽祭」で公式に“子供のためのコンサート構想”が発表され、率先して取り組まれることの大きな柱が紹介された。それは、1)インターネットやメールのニュースレターを活用したネットワークの構築、2)子供のためのコンサートというテーマを広めるための広範な広報活動、3)実践を助けるハンドブックの出版、4)コンサート司会者の育成、コンセプト作り等の教育支援であった。経済的な基礎を支えるのは寄付金付き切手の販売収益を管理する団体、Stiftung Deutsche Jugendmarkeである。今日では450を超えるオーケストラ、文化施設、音楽学校、一般の学校、フリーの音楽家等の個人・団体が子供のためのコンサート構想のネットワークに集まっている。⁽¹⁰⁾

また、作曲家や現代音楽を演奏するグループも子供のためのワークショップを行っている。そこでは子供に演奏を聴いてもらうだけでなく、子供も実際に音を出して室内楽のような「対話」に参加し、音楽を形作るプロセスを体験してもらう試みがなされている。聴衆とのこのような向き合い方のスローガンは“Konzertpädagogik(コンサート教育)”というもので、「音楽家は誰でも音楽を伝える者であり、コンサートする人は皆、教育家である。なぜなら、私たちが練習し、奏で、人前で演奏する全ての音は、響くコミュニケーションであり、歴史と人の社会、精神と感情、身体性と人間性であふれているからである(リューディガー)⁽¹¹⁾」という考え方に見られるように、音楽を伝えることの中には演奏すること、人に分かるように話すこと、企画すること、マネジメント能力、教えること等、様々な切り離せない要素が含まれているのだと演奏家や創作者が自覚し、各地で積極的に子供たちの元へ音楽を届ける活動をしていることが分かった。

3. 大学教育の中でできること

音楽を学ぶ学生は、練習室に引きこもって演奏技術を磨くだけでなく、音楽を人に伝えることを念頭に置き、そのためには何をしなくてはいけないのか、自ら考える習慣を持つべき

であろう。その第一歩は、コンサートホールやその他の場所で行われている文化的催しを聴きに出かけ、ステージの上で起きていることを自分で受け止めることである。その場にいることによって聴衆は何を求めているのかが見えてくるし、自分なりの“良い公演”の判断も周りの意見に左右されずに出来るようになる。学生には青少年のための招待や割引を活用して、公演の現場に実際に数多く足を運ぶようにいつも勧めている。

聴く人のことをよく考えたプログラムを構成し、演奏できるように力をつけるためには、学生のうちから実践経験を持たせたい。私が学んだドイツの大学院では、市民に公開される学生コンサートや、学内関係者のみに公開される試演会が数多く行われており、学生の演奏に対してその日の出来栄に応じて容赦なく拍手の量を加減する地域の聴衆に励まされ、育てられたことに感謝している。学内コンサートではしばしば解説付きのスタイルが取られ、コンサート・シリーズの担当者や教授による曲間のトークが初めて聴く作品の理解を助け、聴く人がより強く音楽に親しみを感じ、作品と自分との接点を作り出すのを助けてくれた。その時に聴いた良い解説は、演奏家が他の人の身になって考えるとはどういうことなのかをはっきり教えてくれ、現在、自分が学校訪問コンサートをする際に生きている。大学という守られた空間で学生が演奏や自己表現をなるべく多く経験し、演奏の中身へのアドヴァイスだけでなく、立ち居振る舞いやマナーについても教えを受けられるのは大切なことである。大きな学内コンサートでなくても、実技のクラス内での発表会やレッスンを公開する際に、聴いている学友の前で楽曲について自分の言葉で話す訓練をさせる等、音楽を伝えるための小さな工夫を積み重ねることはできるだろう。

訪問コンサートのようにある程度、予め聴く人の年齢が分かる場合には特に、ふさわしい曲目を選び組み合わせる、レパートリー開拓能力も学生のうちに身に着けたいものである。試験の課題曲だけでなく、それよりずっと短い小品も数多くレパートリーにしておく等、聴衆に喜んでもらえそうな優れた作品や、コンサートのアイデアを日頃から探す好奇心と、人に対する関心と共感が必要であろう。

むすび

自分が体験した学校訪問コンサートを振り返り、日本やドイツにおける子供のためのコンサートの様々な活動を調べることで、音楽との出会いを創造する活動の素晴らしさを再確認した。音楽をより身近な存在にするための活動も、音楽教育に携わることも、人との交流が好きでないと始まらないところは共通で、種を蒔いて、育ちゆくものを見る喜びもまた同じである。これからも、耳と心を開いて、音楽を通じた交流と出会いのひとつひとつを大切にしたい。

参考文献

- 1) Hahlweg, Detlef, JUGENDORCHESTER VERANSTALTEN KONZERTE FÜR KINDER, „Spielräume Musikvermittlung Konzerte für Kinder entwickeln, gestalten, erleben“, ConBrio Ver-

lagsgesellschaft, Seite 205, 2002

- 2) McNicol, Richard, ORCHESTRAL CONCERTS FOR YOUNG AUDIENCES Wie man Orchesterkonzerte für ein junges Publikum gestaltet, (Übersetzung: Ackermann, Zeno), „*Spielräume Musikvermittlung Konzerte für Kinder entwickeln, gestalten, erleben*“, ConBrio Verlagsgesellschaft, Seite 120, 2002
- 3) 前掲・参考文献 2) 参照
- 4) Eberwein, Anke/ Koch, Hans w./ König, Bernhard, FÜNF THESEN ZUR KONZERTPÄDAGOGIK, „*Spielräume Musikvermittlung Konzerte für Kinder entwickeln, gestalten, erleben*“, ConBrio Verlagsgesellschaft, Seite 262, 2002
- 5) Richter, Christoph, DAS ORCHESTER TANZT Anmerkungen zur Vorbereitung für Kinder- und Moderationskonzerte von der Musik aus, „*Spielräume Musikvermittlung Konzerte für Kinder entwickeln, gestalten, erleben*“, ConBrio Verlagsgesellschaft, Seite 92, 2002
- 6) Schruff, Christian, KINDERKONZERTE MODERIEREN Tipps aus der Praxis, „*Spielräume Musikvermittlung Konzerte für Kinder entwickeln, gestalten, erleben*“, ConBrio Verlagsgesellschaft, Seite 129, 2002
- 7) 三善 晃、「音楽教育の難しさと幸せ」、『シリーズ 授業8 音楽 リズム表現と合唱』、岩波書店、182~183項、1992年
- 8) 『公共ホール音楽活性化事業 おんかつハンドブック』、財団法人地域創造、4項、2008年
- 9) 参照: 『NPOトリトン・アーツ・ネットワーク アウトリーチ ハンドブック』、NPOアウトリーチハンドブック制作委員会、2007年
- 10) Rietschel, Thomas, DIE INITIATIVE KONZERTE FÜR KINDER Blicke zurück und nach vorn, „*Spielräume Musikvermittlung Konzerte für Kinder entwickeln, gestalten, erleben*“, ConBrio Verlagsgesellschaft, Seite 13-14, 2002
- 11) Wimmer, Constanze, HISTORISCHE ASPEKTE---GEGENWÄRTIGE SITUATION Konzerte für Kinder haben eine Geschichte, „*Spielräume Musikvermittlung Konzerte für Kinder entwickeln, gestalten, erleben*“, ConBrio Verlagsgesellschaft, Seite 30, 2002